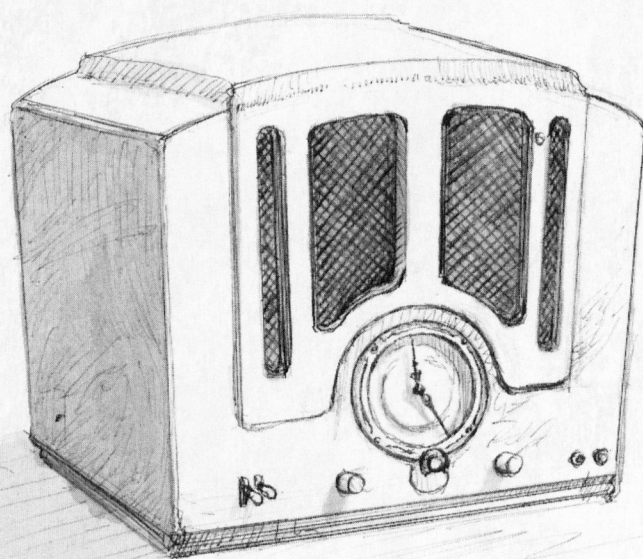


盟連羽灰

脚本集 第三卷

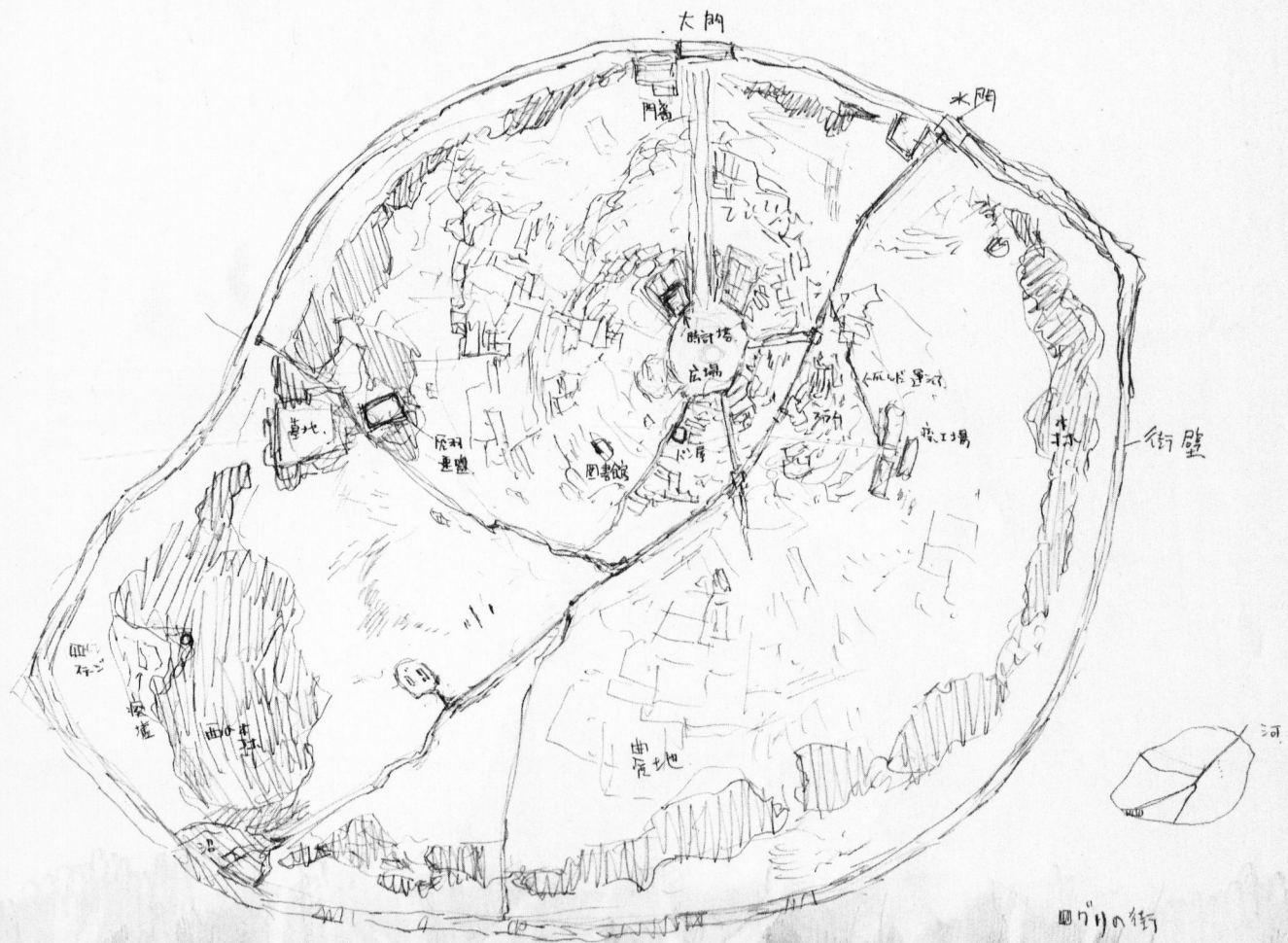


安倍吉俊

灰羽連盟脚本集

第貳卷





灰羽連盟

LA FILLE QUI
A DES AILES GRISSES

HAIBANE - RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第02話 街と壁・トীগ・灰羽連盟

第3稿 (2002.05.23)

●ページの上半分がシナリオになり、下半分が、シナリオに対応した注釈や、図解になります。

▲ファイルを見直す時、初稿が(2002.05.01)、2稿が(2002.05.18)となっている。ずいぶん間が空いているが、1話までは、ある程度平行して改稿を重ねていた。まだ書式が定まらず、普通のテキストエディタに横書きで書いて、提出したら、上田から「こういうものの書式や体裁が素人臭いと現場の士気が落ちる」と言われ、他のアニメのちゃんとしたシナリオの書式ファイルをもって、慌ててそれに合わせるようにした。

もちろん、最初からシナリオの書式で書くべきだったのだけど、何を手本にしていいのか良く分からなかった。まさに手探りである。

○登場人物

ラッカ

レキ

カナ

クウ

ヒカリ

ネム

灰羽の男の子A (シヨータ)

灰羽の男の子B (ダイ)

灰羽の女の子A (ハナ)

年少組の寮母

古着屋

トীগ達 (セリフなし)

灰羽連盟の話師 (セリフなし)

門番 (セリフなし)

▲これも、セリフのない人達は、セリフなしと書かないと、アフレコ合本を作る時に、出番のない声優さんまで間違っちゃって呼んでしまうから、ちゃんと書いておけ、と言われてた。なるほど。

●サブタイトル

●ゲストルームの洗面所、朝

洗面所。着替えているラッカ。レキのお古を着ているところ。光輪と羽のせいで苦戦している。頭を出す事もできない。

ラッカ「いたた……んく……あれ？……よっ……と」

背中から羽が出る。襟を両手でつかんで、ぎゅっとひっぱると、ぼこっと（補助つきの）光輪と頭が外に出る。

ラッカ「ふー……あ」

服が無事着られて一安心、と思つたら、袖も裾も長すぎて、子供が大人の服を着たよう。手が袖からほとんどでておらず、裾も地面に着きそう。慌てて腰の紐を結んで丈を合わせるラッカ。鏡で確認しようとして、改めて背中の羽に目が行く。

ラッカ「痛いつて事は、ほんとに体の一部なんだよね、これ……」

ドアの外で、不意に

子供たち（声をそろえて）「れくきく、あーそーぼー」

という声にする。

●ゲストルーム

ばたばたと入ってくる灰羽の子供達。

レキ「あーっ！コラ！この部屋は泥靴で上がっちゃだめっていつてでしょ！」

かまわずレキにまといつく子供たち。男の子が2人、女の子が1人。

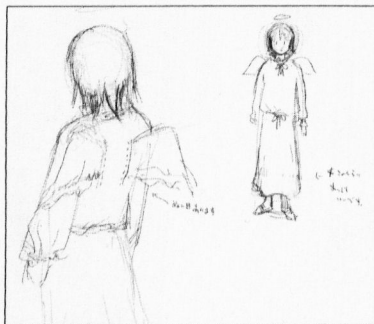
男の子A（シヨータ）「レキ、どうして教室こないの？」

レキ「お姉ちゃん、新入生のケアがあるから休むっていったら？」

（ちよっと身をかがめて子供の目線に合わせるようにして）

あつ、擦りむいてんな。ケンカか？」

シヨータ「ううん。チャリでコケた」



■右と上はお古の服設定。下は、『下着ってあるの？』とスタッフの誰かに聞かれ、どりあえず描いたもの。だったと思う。



▲背中には根が生えたキャラクターというのはアニメや漫画ではよくあるけど、こういう部分について考えているものって案外少ない。まあ、リアリティについて考える必要がないタイプの作品が多いからなんだろうけど。考えてみると不便だらうなあ、と思う場面が結構あります。

▲お古と言うことで、服の色を魚が茶にしましたが、ほんとにかわいそうなくらい倉相でした。上田さんがどこかで「知らない世界に来て、いきなりこんな服着させられたらイジメかと思うよな」と言っていた。確かに。

ラッカ、おそろおそろという感じで、洗面所のドアを開け、部屋の中を伺う。レキ、それに気づいて

レキ「あ、着替え終わった？サイズどう？」

ラッカ「うん、平気みたい」

レキ「よかった。着るものないと、外にも出られないもんね。ベランダにおいてよ。いい天気だよ」

●ベランダ

ベランダへ続くドアが開けられる。外は快晴。光が差し込む。

ラッカ「わあっ！」

周りを見回し、深呼吸するラッカ。

レキ、櫛をくわえてサンダルを履きながらテラスに出てくる。

レキ「羽が水を吸ってるから、軽く陽にあけるといいんだ」

ラッカ、ベランダの端まで歩き、外を見る。緑の多い中庭。その向こうに、たくさんの風車の見える丘。その向

こうにかすかに街並み。

ラッカ「知らない街……。ほんとに、知らない世界に来ちゃったんだ……………」

女の子A（ハナ）がラッカのスカートの裾をひっぱる。

ハナ「ねえねえ、おねーちゃんが新入生のひと？」

ラッカ「う、うん」

ハナ「ね、これできる？」

ハナ、羽をぺちんと打ち合わせる。

ラッカ、試そうとするがうまくいかない。

レキ「ハナっ！変な事教えない！！」

テラスの片隅のイスに座る二人。櫛のようなものでラッカの羽を丹念に手入れをするレキ。

レキ「ムリするとまた痛くするよ。まだカサブタなんだから。あつホラ」

レキ、ラッカの羽が急に動くので注意する。

▲正式には『新生子』という名称だが、年小組に対してなので、レキは分かりやすい言葉を選んでいる。

▲設定としては、ちゃんと外靴と部屋靴の区別があります。でも履き替えるシーンは出す機会がほとんどありませんでした。どうしても自分では絵の事にしか頭が回らないのですが、アニメになる際にはちゃんと靴音も設定されていて、細かいなあと感じました。

▲同人誌で描いていた時は、本当に一コマ先の設定すらつくらずにアドリブで描いてゆく、という手法だったため、窓の外の風景はずいぶん違っていた。丘に風車はなく、オールドホーム自体も6階建てくらいで、ゲートルームは3階か4階くらい、と思っていた。

ラッカ「ごめんなさい。でも、腕を動かそうとすると勝手に……」
 (また羽がばさつと動く)

レキ「そっか。大丈夫。すぐ慣れるよ」

シヨータ、頭を指さし

シヨータ「あつ補助がついてる、ほじょー！」

ダイ「せなか見せてー」

ラッカ「え・う、うん」

シヨータ、ダイ、ラッカとレキの間に潜り込むようにしてラッカの羽を見る。邪魔そうなレキ。まだ生々しいラッカの羽の付け根。

ダイ「わー。いたそー」

シヨータ「泣いた(ラッカに向かって)?」

ダイ「僕は泣かなかったよ」

シヨータ「うそだー」

ダイ「なんでうそだつてわかんだよ」

レキ「ホラ、ケンカすんな」

ハナ、ラッカの隣に立ち、両手を前に出してラッカを見上げる。

ハナ「おねえちゃん、れんしゅー。両手をまえにだしてー」

ラッカ、きよんとする。

ハナ「いち、にー、いち、にー」

ラッカ「え? わつ」

レキ「やれやれ……」

作業にならない、という感じで立ち上がるレキ。門の方から、かすかに声がしたのに気づき、何気なく外を見る。

ネム達。

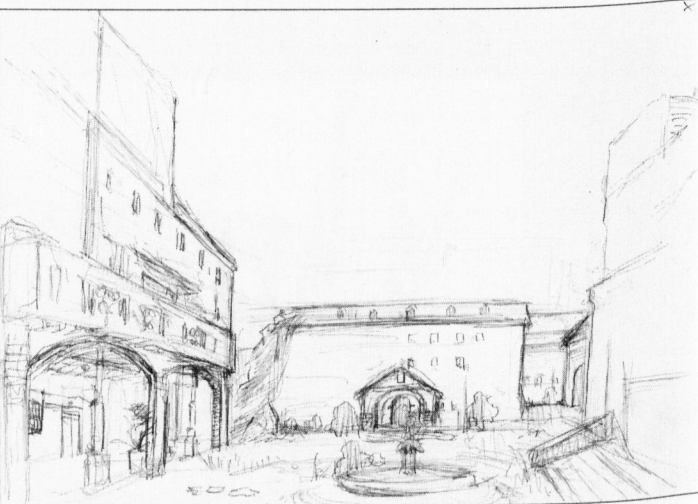
クウ「レッキ。おはよ。ごはん買ってきたよ」

レキ、軽く手を振って。

レキ「あ、サンキュー」

●ゲストルーム

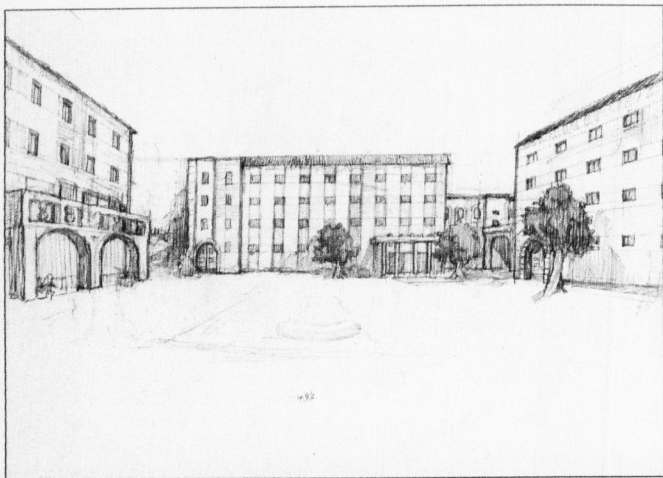
食卓に着くみんな。レキがお茶をついで回っている。オー
 トミールみたいなものと目玉焼き。

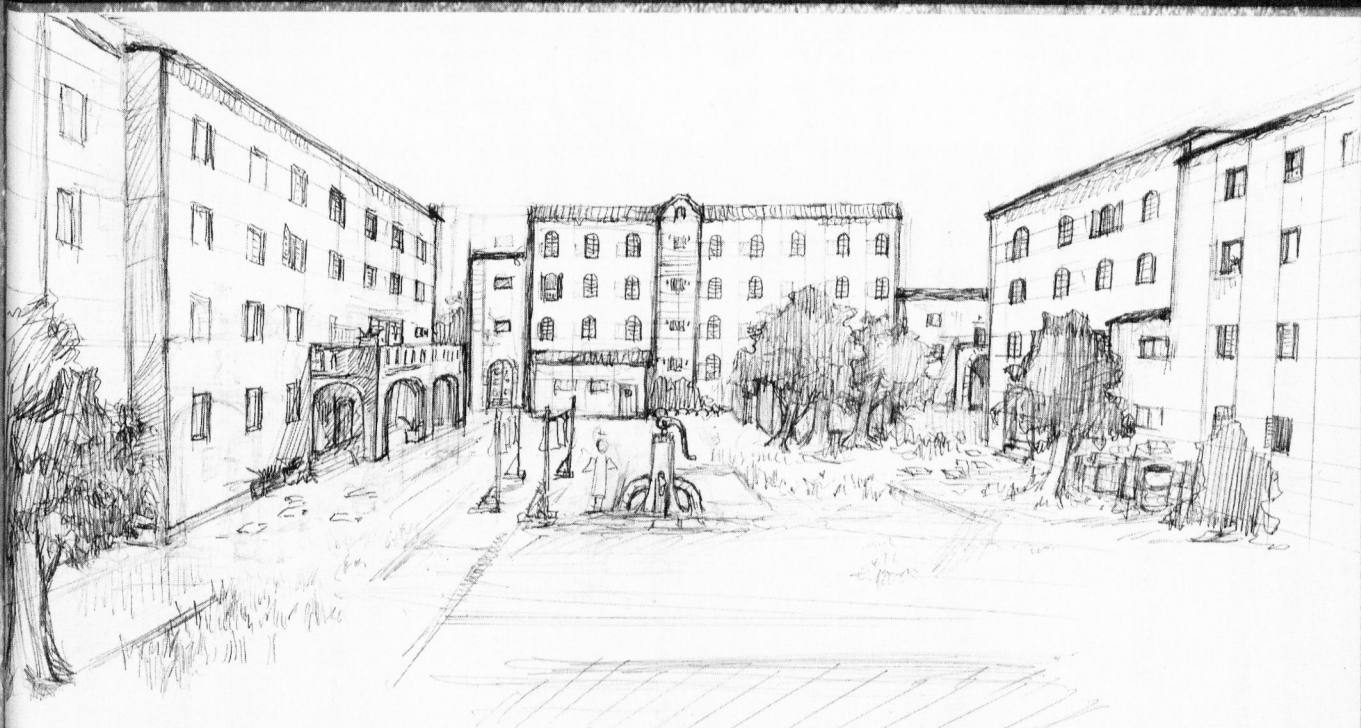


■オールドホーム全景、ポツ稿その1。やはり6階建てくらいで考えている。中庭中央にあるのも、井戸ではなく、噴水のように見える。北棟も、第一棟がなく、崩れた第二棟が見えている。さらに、物焼きや藤棚がなく、東棟の入り口に大きな階段がある。

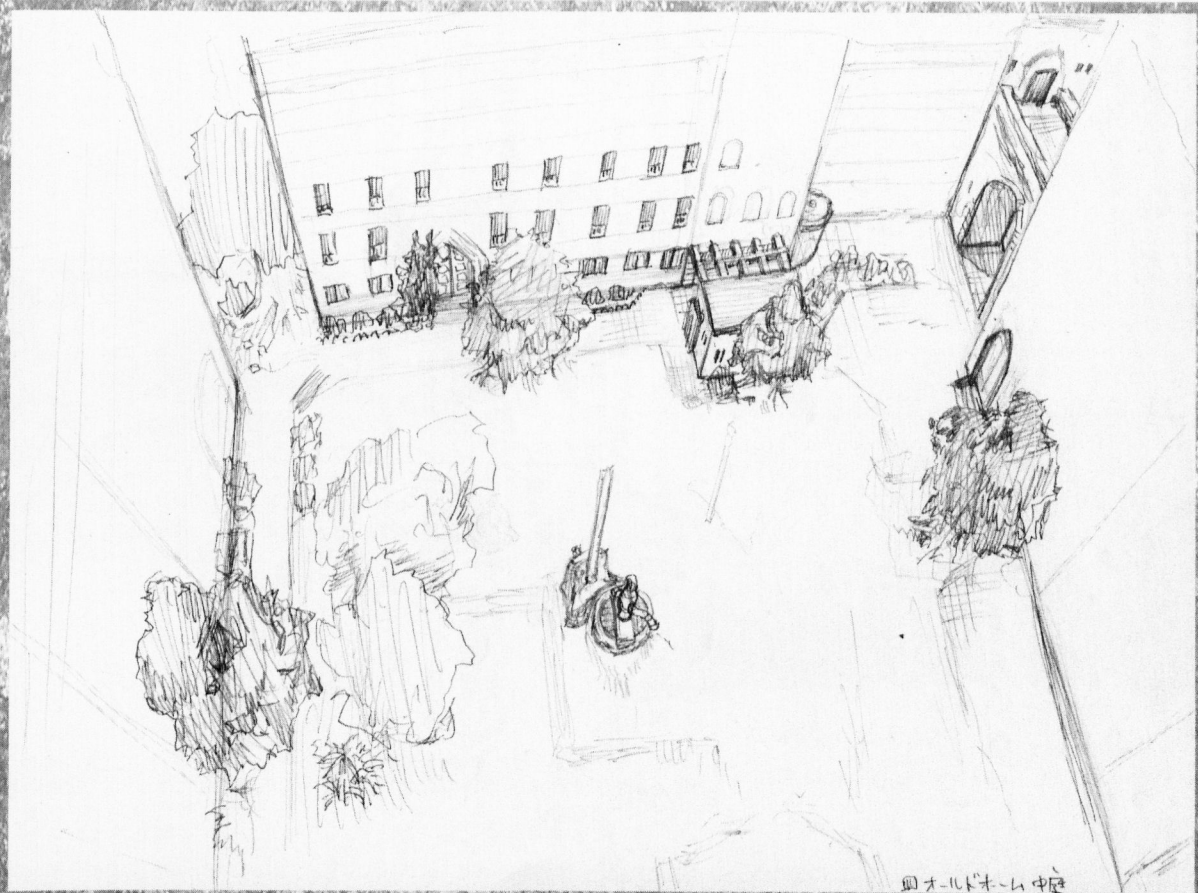
■ポツ2。建物は4階建てになっている。だが、北棟、東棟のデザインが違う。藤棚がついた。まだ物置はない。北棟の藤棚のところに入り口があって、その奥に共用のシャワー室、浴室があるという設定だったが、登場する機会がなかった。

▲あ、いかん、目玉焼き……。
 と思ったけど、卵がないと食生活が
 成り立たないので、開き直りました。

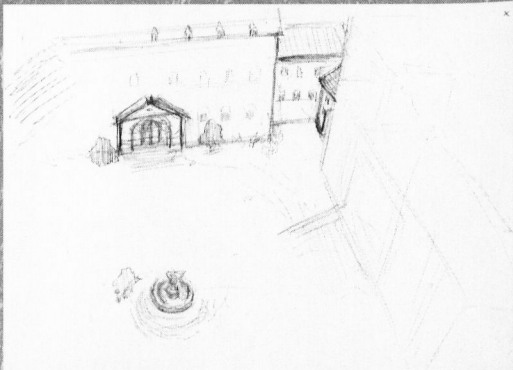




上はオールドホーム全景、ほぼ決定稿。中庭中央の物体が、やっと井戸（ポンプ式）になりました。これを美術監督さんにきちんとした設定に仕上げてもらいました。東棟の継ぎあてのような部分は、変則的な増改築の跡なのか……。資料として見ていた大量の写真の中に、こういう変な建物があって、それが記憶に残っていたのだと思うが、今探しても、そういう写真は見つからない。何だったんだろう。下は、俯瞰図。比較的初期に描いたもの。西棟にベランダが無いが、藤棚と物置はあり、焼却炉へ続く小アーチ門もある。井戸のデザインは古い。過渡期的な設定画。



旧オールドホーム中庭

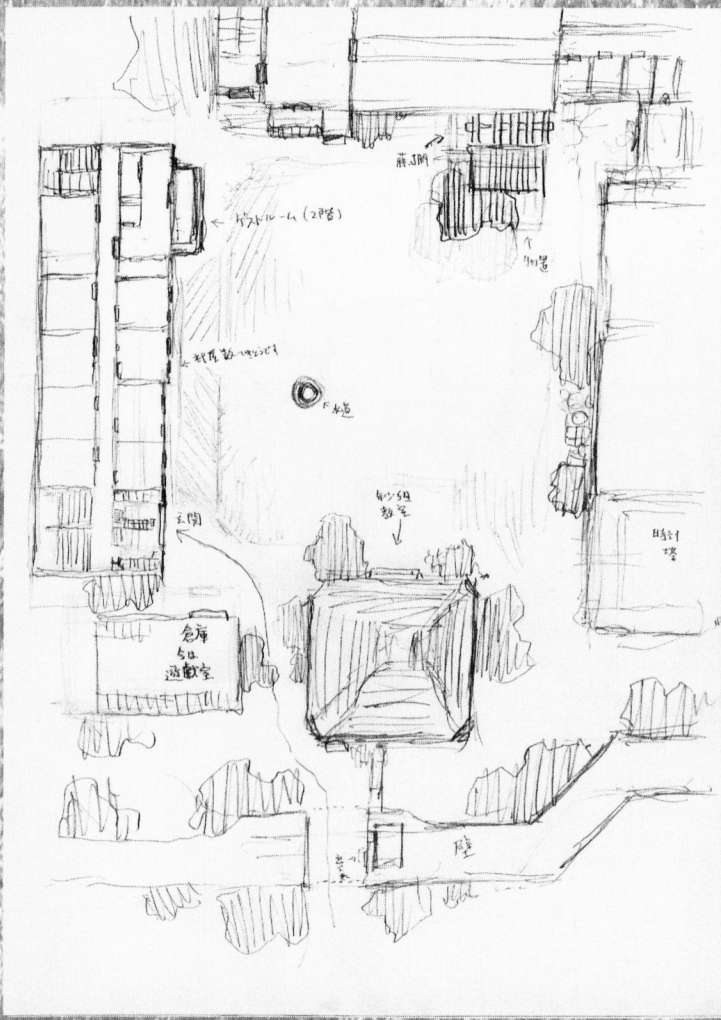
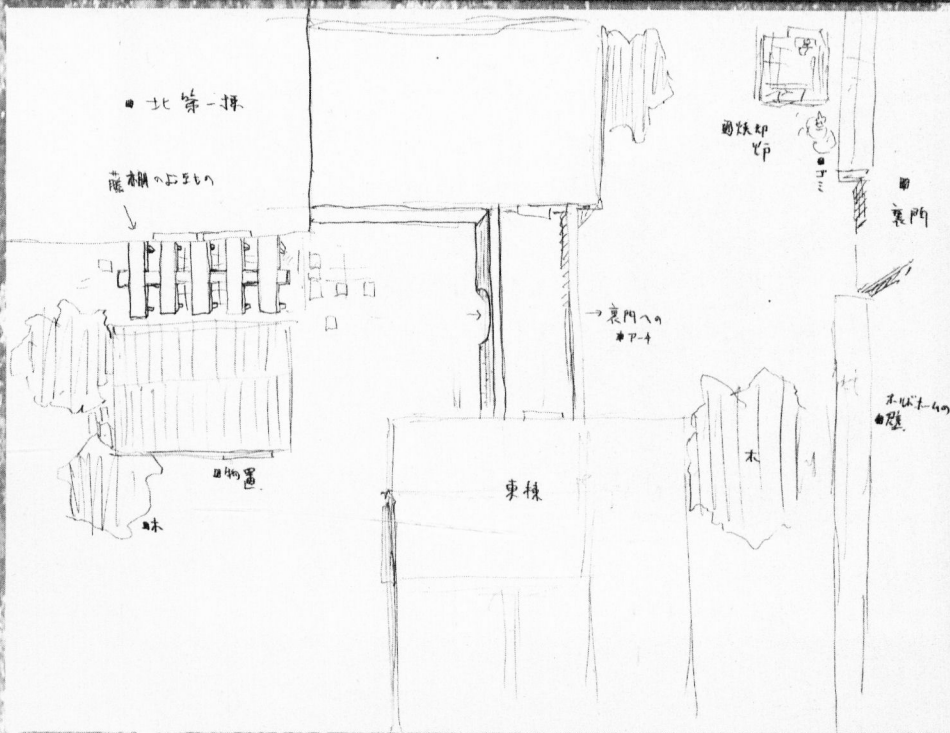


■中庭初期稿。描きながら頭の中のイメージを整理しようとしている。これを描きながら、北側に焼却炉を置こうと思った。

■下も中庭の初期稿。井戸のデザインが古い。最終的には上のようなポンプ式の井戸になった。これは、もともとは同潤会アパートの写真集の中にあつた使途不明の物体がベースとなっているが、いつの間にか記憶の中で変形して、ポンプ式の井戸になっていた。僕は資料をそのまま描くのではなく、見て記憶して、記憶をもとに描く事が多いので、そっくりに描いたつもりが全然別物になっているような事は良くある。



■オールドホーム 中庭



■地図2点。左は全景、上は北側、焼却炉付近。まだ個々の建物の大きさや配置の関係が厳密には違っているが、いちおうの目安にはなっている。左図、西棟内部は、通路の両側に部屋があるように描かれているが、これだと廊下に窓が無く、窓から差す光で時刻や心象を表すような演出が使えなくなるという事で、変更になった。

藤柵はなんだか気に入っていたみたいで、設定にはたびたび描かれているが、出番がなかった。残念。

子供たちも一緒。背の高い、子供用椅子をどこからか持ってきている。それでもテーブルがちょっと高すぎる感じ。

席順は、上座にレキ。今回はその両わきに子供たち。時計回りに、ペランダ側の2脚がヒカリ、ラッカ。入り口側がクウ。キッチン側2脚がカナ、ネム（一応の目安なので、変更しても構いません）。

ヒカリ「ラッカ元気そう。よかった」

ネム「ほんとだね。熱は？」

ラッカ「うん。朝起きたら、もうすっかり良くなって」

レキ、子供たちに料理を取り分けながら

レキ「まったく、当たり前のように人の部屋をたまり場にして……」

……

ネム「なんか落ち着くのよね」

レキ「そうやって我が家のように上がりこんでくつから、チビ共が

マネするんじゃない」

ヒカリ、ラッカにむかって

ヒカリ「ふふ、ホントはレキがゲストルームに住み着いちゃったのよ」

よ

レキ「最初の最初は私の部屋だったじゃん。あーあ、応接セットなんて拾ってくるんじゃないか」

ネム「新しい部屋、どこにするの？」

レキ「2階上の階段脇」

ネム「すぐ隣も空いてるのに」

レキ「このこと同じ階だと、安眠を妨げられそうだし」

食事を終え、煙草の箱をとんとんと叩いて、1本取り出すレキ。

すレキ。

ネム「一番寝起きが騒々しいのはあんたじゃない」

ネム、テーブルにおいてあったレキのライターを素早く取り上げる。

レキ「起きる努力を放棄してる人に言われたくない」

レキ、仕方がない、という感じで煙草を箱に戻す。

カナ「ネムのいねむりは筋金入りだからね。夢の中で眠る夢をみるくらい。だからネムってんだけど」

ネム「もう、いいじゃないその話は」

▲どこからか……なんていい加減な事を書いてしまったが、ちゃんとスタッフの方で子供用椅子の設定をつくってもらった。ありがたや。

▲思わせぶりの会話だが、この時点ではまだクラモリの存在は全く考えていなかった。

▲この時はまだ西棟を何階建てにするかも、レキの部屋をどこにするかも確定していなかった。結局レキの部屋は3階になり、セリフを変更した。他にも、冗長な部分があり、いくつか修正している。

▲僕は煙草を吸わないので、煙草の銘柄やライター、マッチなどにあまりこだわりがなかったが、このあたりは助監督の大森さんが率先して設定してくれた。灰羽を見た後で、イムコのライターを買ったという人が結構いたようだが、そういう意味でもとてもいい設定だったのだと思う。

ラッカ「最初に見た夢で名前が決まるの？」
カナ「そ。誰が決めたのか知らないけどシキタリでね。ま、子供達

はそんなのお構いなしだけど」

ハナ、脚をばたばたさせながら。

ハナ「…………おはなやさんになりたいの。だからハナ」

ダイ「ぼくは大工さん」

ラッカ「はは……将来の夢ね」

シヨータ「シヨートケーキ！」

ダイ「シヨータのはただの好物じゃん」

シヨータ「ちがうよ。夢にでてきたんだよ！」

レキ「ダイ、シヨータ、ケンカしない！」

ラッカ「そうだ、レキは？」

レキ「え、私は…………」

シヨータ「石ころのレキ！」

ラッカ「え？」

レキ「ええと、つまり瓦礫の礫。月の出ている夜に、石ころだらけ

の道を歩いてゆくんた。ずっと…………」

ヒカリ「そういうえは歩くの好きだよね、レキって」

ネム「引越しも好きよね」

レキ「よく言うよ。追い出したくせに」

クウ「私たちも歩こっか。ラッカ、街に行こうよ！歩ける？」

ラッカ「うん」

クウ「レキ、いいよね？」

レキ「ラッカがいいなら」

ヒカリ「一緒に来ないの？」

ようにね」

ラッカ「う、うん…………」

● 街

ゲストルームのあった棟の玄関をでると中庭。中央に小さな井戸。周囲にあまり高さのない厚い石壁があり、壁の一角にアーチ状の出入り口がある。壁が厚いのでトン

▲初期の設定では、自分の最初に見た夢がどういふものか説明できない（語彙が足らなくて）くらい幼い子供については、好き勝手に名前を付ける、としていた。最終的には、年齢によっては、頼が見つかった場所や、その日の天候などから名前が付けられている子供もいるし、ダイやシヨータのように、将来の夢を名前にしている者もいる、というような設定になった。そういう灰羽は、自分の夢が説明できるようになった時か、年長組に上がる時に、夢からとった名前に改名する。名前が変わる、というのは、灰羽にとっても、もちろん特別な事なので、その時には改名式、みたいなものが行われるのかもしれない。もう少し話数があつたら、ダイが廃工場に帰り、改名するエピソードで、ちょっといいお話がつけられたかもしれない。

▲レキのように、自分の夢が説明できる年齢であるにも関わらず、自分の見た夢が良く分からない、思い出せない、というのは異常な事。

▲この正門が、オールドホームの最初のイメージ。フランスに旅行に行った時、偶然通りかかった街角に小さなアーチ門があり、何気なく通り抜けてみたら、門を抜けた向こうには、小さな中庭（オールドホームの中庭の三のくらい）と、それを囲むように、小さな学校か病院のような雰囲気、白い壁の建物があった。雑踏がすっと消え、冷たく澄んだ空気と、中庭に降り注ぐ穏やかな陽射しの中で、ぼんやりと立ち尽くしてしまった。ちょっと不思議な空間で、これを物語に使いたいなと思った

ネルのよう。
ラッカ「わあ・・・」

アーチ抜けると、典型的な田舎道が小川に沿って続いている。緑が多く、遠くに街が見える。振り返ると石壁の向こうに、オールドホームが見える。廃虚のような、生

活感の在るような不思議な雰囲気。

ネム「大昔はさ、ここは学校か寄宿舎みたいな建物だったんだって。それが使う人がいなくなって棄てられて、いつの間にか灰羽の巣になったんだってさ」

ヒカリ「みんなオールドホームって呼んでるの。いい所よ。半分くらい電気が通ってないから、ランプがないと夜、恐いけど」

カナ「なにしろこのただっ広い建物に、住んでるのはアタシらの他はチビ共と寮母のばあさんだけだからね。ラッカも好きな部屋選びなよ」

クウ「結局ゲストルームにたむろする事になるけどね」

●グリの街

市街地に入る。古いヨーロッパ風の町並みと、アジア風の装飾がごた混ぜになった、不思議な街並み。街路の両端には露店がばらばらと出ている、街路の中央が歩道になっていたり、街路中央が並木や花壇になっていたりする。朝市が引けて、昼食には間がある時間なので、人並みはややまばら。3卓ほどのテーブルしかないこじんまりとしたオープンカフェに、人間の老夫婦がいて、通りを歩くラッカ達を見て、につこり微笑む。辺りをきよるきよるしながら歩いてきたラッカだけが目が合い、ちょっとどぎまぎしながら会釈する。

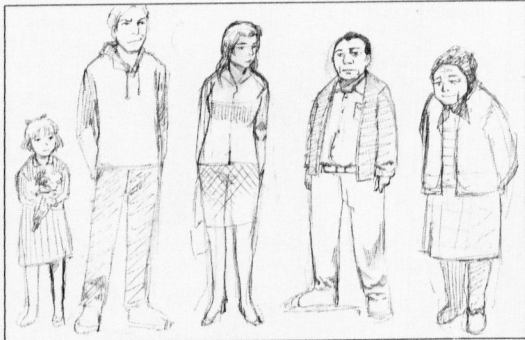
ラッカ、すぐ前を歩いているヒカリに

ラッカ「普通の人もいるんだ」

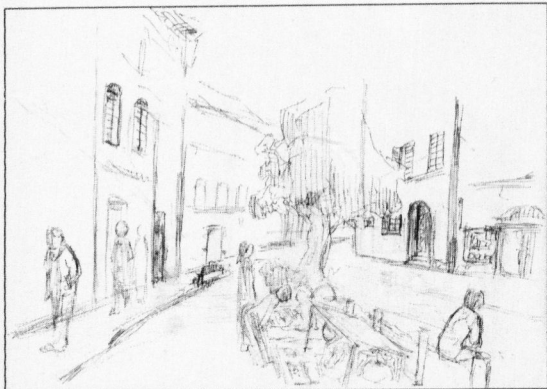
ヒカリ「もちろん。ていうか人の街に灰羽が居候してるのよ。」

カナ「そして人が使い終わったものを引き継ぐのが灰羽の務めなんだとき。やんなるよ、服とか」

クウ「そうだ、服屋いこーラッカの服も買わなきゃだし」
カナ「あの古着屋あ？……まあいいけど」



■街の人達、もっとこういうのをたくさん描きたかった。グリの街の雰囲気は、例を出して『××みたいな感じ』という説明がしづらいので、街の人の服装なども、指定しないと、つついサラリーマンのようなスーツの人が出てきてしまったりする。



▲街とオールドホームを繋ぐ道の設定画は次ページから。オールドホームはずっと昔、病院として使われていた時期もある。北第二棟と付近の壁はその当時に破壊した。しかしその時期の事はほとんど知られていない。

▲脚本集の二巻にも書いたが、街の雰囲気は、もう少し現代の日本的な要素が混ざる可能性もあった。しかし、2002年初頭のフランス旅行のおかげで、現在の雰囲気に定着した。結果的には、適度な異国感があって、これで良かったと思う。

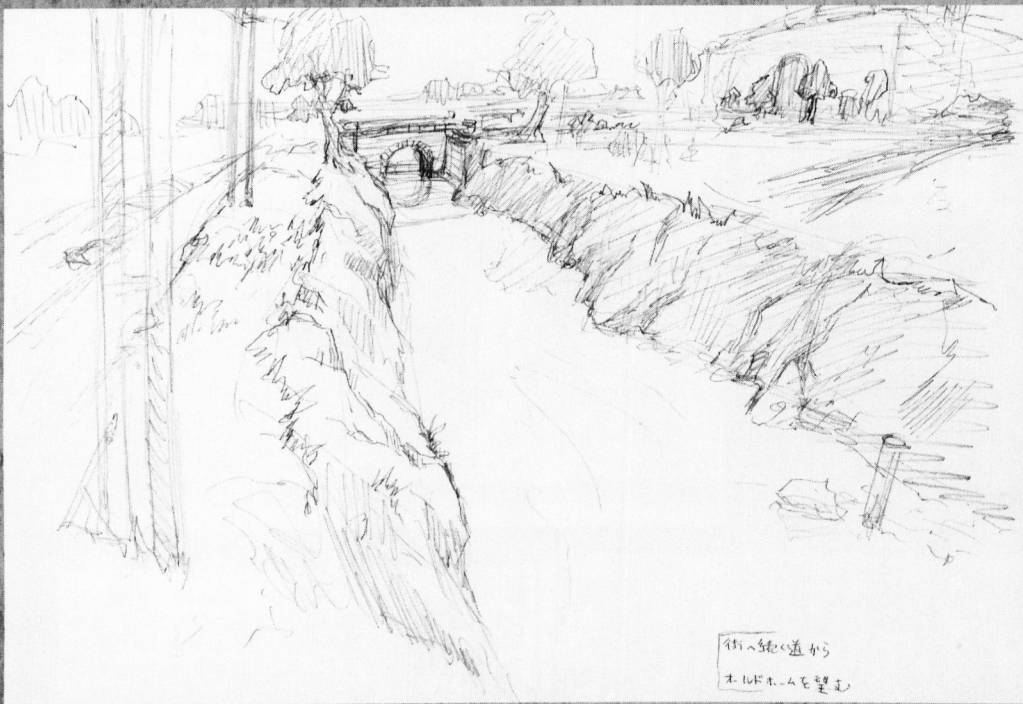
■街とオールドホームを繋ぐ道。川沿いにはぼまっすぐな道が続いている。オールドホーム付近は細い畦道で、街に近づくにつれ道幅が太くなり、並木などもあったりする。街の側が低くなっている。道の東側は農地。



■オールドホーム前の橋、初期稿。橋の脇の木は、レイアウト的に邪魔になる事が多くて、結局無くしてしまった。レキの描いた絵の中などに、ちょっと位置を変えて立っていたりする。



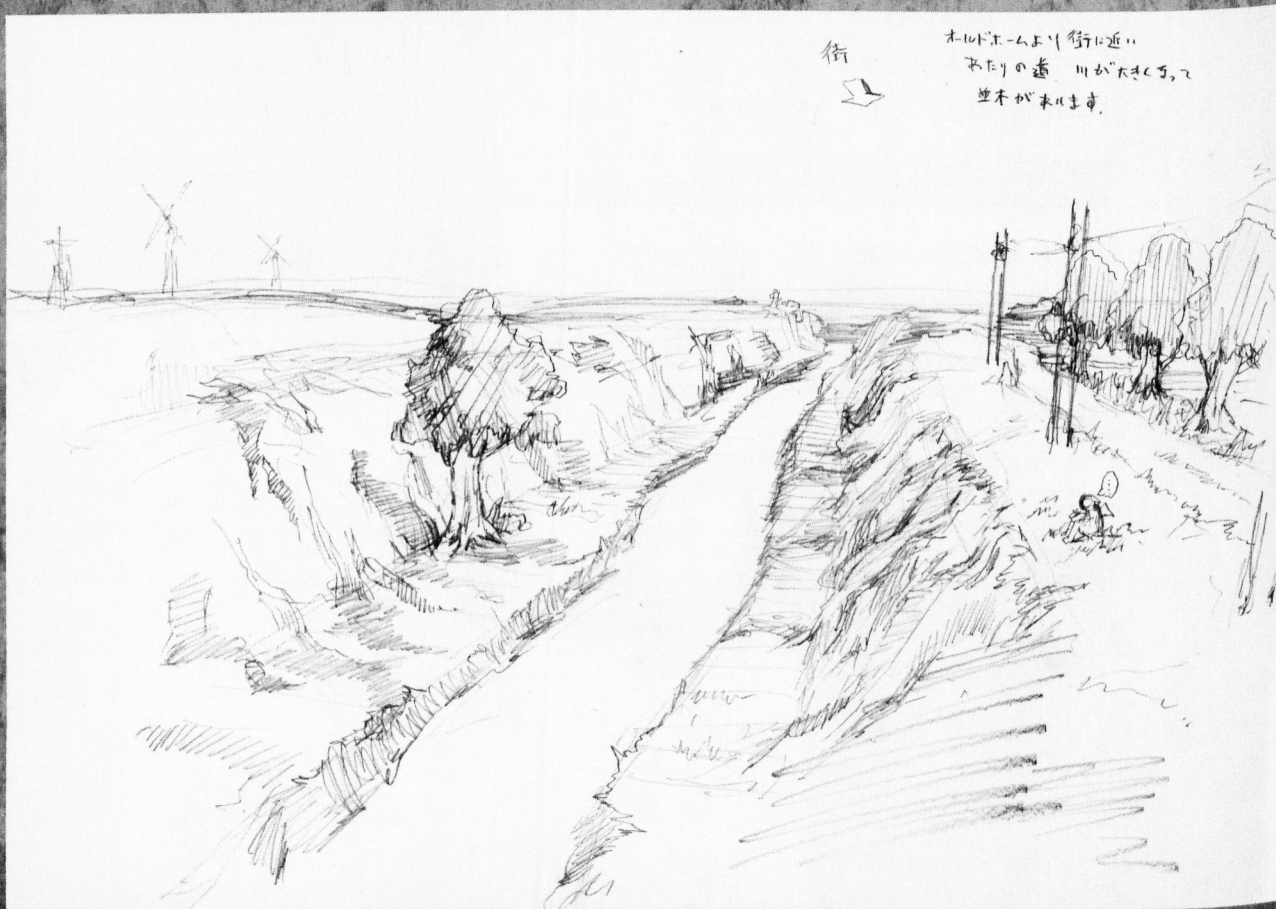
オールドホームに繋ぐ
橋から街の景色
見る



街へ続く道から
オールドホームを望む

■ 変な電柱。一応電気は通っている。風の谷に風車があつて、それで電力の一部は賄っている。風車の設定は大森さん。僕のこの絵では羽根が4枚だが、結局3枚になった。

僕の絵には無いが、街とオールドホームとの距離感を出すために、美術監督の片平さんに中間地点にちよつとした小屋のような物を設定してもらった。背景が単調にならないようにという配慮からだが、この道沿いのシーンは、風の丘が背景になる事の方が多く、あまり出てこなかったように思う。

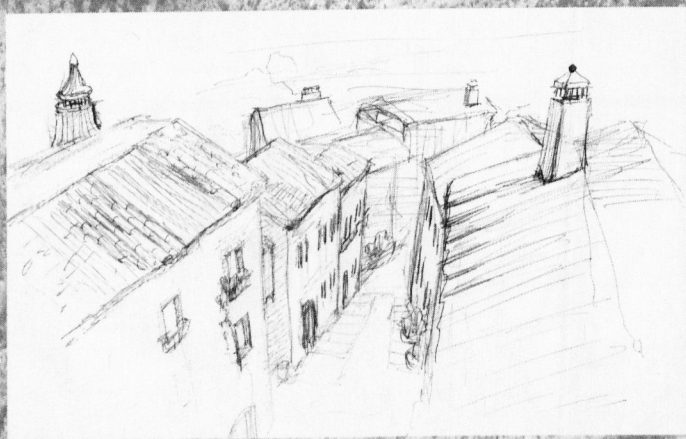


街



オールドホームより街に近い
あたりは遠く川が太く、
並木が太く、

■街、初期に描いた絵。階段の多い街にしようと思っていた。この階段はちょっと急すぎるけど。



■街のディテールに、何か特徴をつけようと思って、あれこれ考えていた時の設定画。煙突に特徴をつけようとして、ずいぶん考えていたが、考えたら俯瞰図以外、煙突って画面に出てこないですね……………。

ポルトガルのオビズ
という家が変な意味で有名らしいですが、
このへんで特徴
つけてもいいかも
オビズ赤の白いローマン風の
かわりに白く塗る意味
のイメージです。

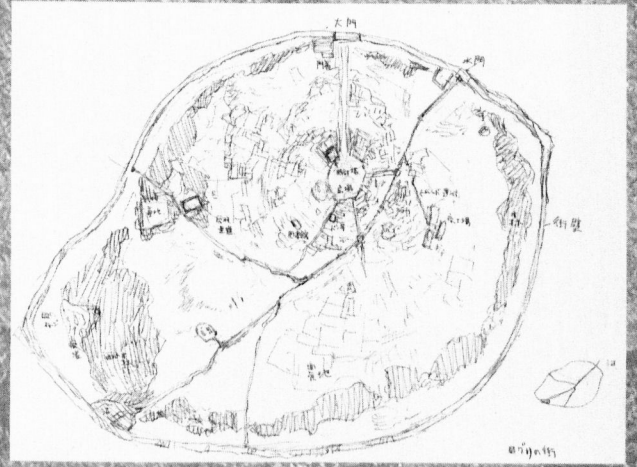
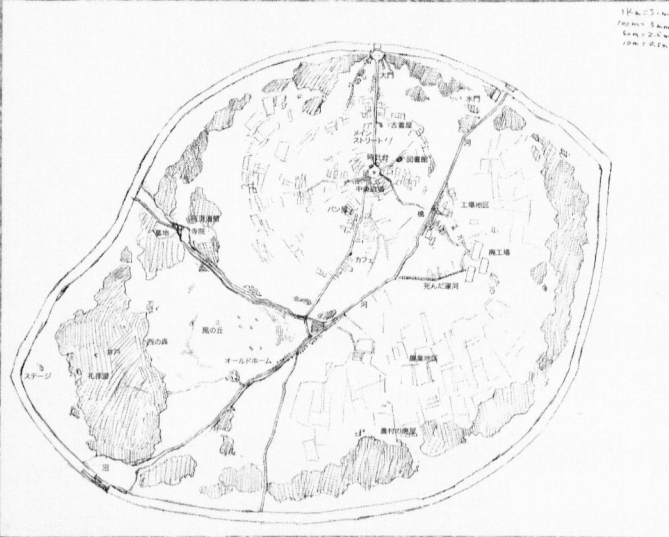
カマラカシ

田舎の家の並は、
屋根の感じが、五つてリアルな的に
へいおとした感じ。究も、一件の中で
デザインが混在してたりします。
多岐性があるところが

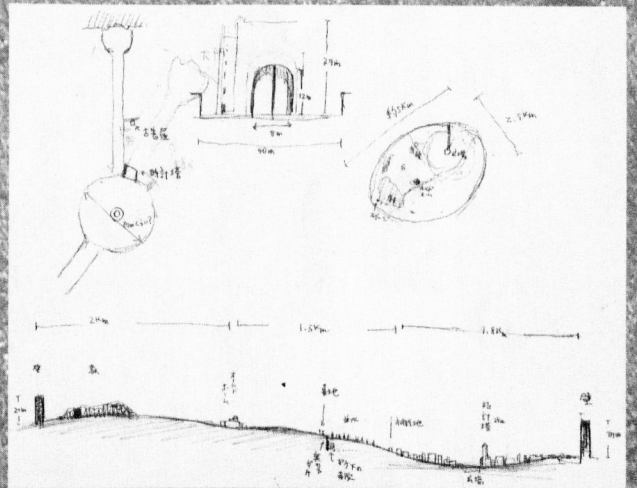


道幅は
せまですが、一歩目には
柵木がまさんでいて
さらに歩きにくくおたり
車が通るので、階段の段差が
多いです

■街、ラフラフですね。とにかく手を動かさないとまずい、という時期でした。考えてしまうと手が止まるので、形とか変でもいいから、とにかく手を動かして、手で考えるようにしていました。



■色々ところで使われましたが、地図です。縮尺は暫定的なもので、まあ目安程度です。北の水門、出てきませんでしたね。西の森の沼も。



ラッカ「古着屋？」

ヒカリ「一応、お古しか着れない決まりなの。だからみんな裁縫はうまくなるよー。羽袖あけたり、寒くなったら羽袋つくったりしなきゃならないから」

ラッカ「はねぶくろ？」

ラッカ、神妙な顔で何かを想像している。

● 古着屋

メインの通りから少しはずれたやや狭い道。商店街なので、住宅地ほど窮屈ではないが、勾配も多く、車がないため、階段が多い。

そんな一角に古着屋の看板。建物も古く、壁や窓に落書きがいつぱいある。

● 店内

店の中に客はいない。店は狭く、カウンターには2、3の若い男が退屈そうに机に顎をのせ、目を閉じて、いかにも旧式という感じの巨大なヘッドフォンとラジオで音楽を聴いている。

ドアを開けるカナ。ドアの上にブリキの小鍋とそのフタがぶら下げられていて、ガラングロンと音をたてる。店員、目を開けずに

店員「いらっしやーい」

店員、いったあとで、大仰にあくびと伸びをして、ヘッドフォンを外し、目を開ける。

店員「……ああ、灰羽か。あれ、見ない顔がいるね」

ヒカリ「あ、新生子（しんせいし）です」

店員「へえ……ああ、それで」

店員、自分の額を指でつつく。ラッカ、頭の補助の事を言っているのだと気づき、恥ずかしそうに、前にいるヒカリの陰に1歩隠れる。

店員「（ちよっとにっこりして）じゃあ、そっちのコーナーから、

▲この時は、古着屋は大通りからちよっと外れた位置に置こうと考えていた。しかし、地図をつくってみて、前後の話のつながりから、大通りから一本入った細い路地に決まった。



■古着屋、決定稿。まあ、普通に古着屋っぽく。脇役だけど、最初に接触する街の住人なので、店の外観や店内のディテールも結構気を使った。



▲冷静に考えると、紙の補助つけたまま歩き回るのって、ちよっとアホっぽいですね。

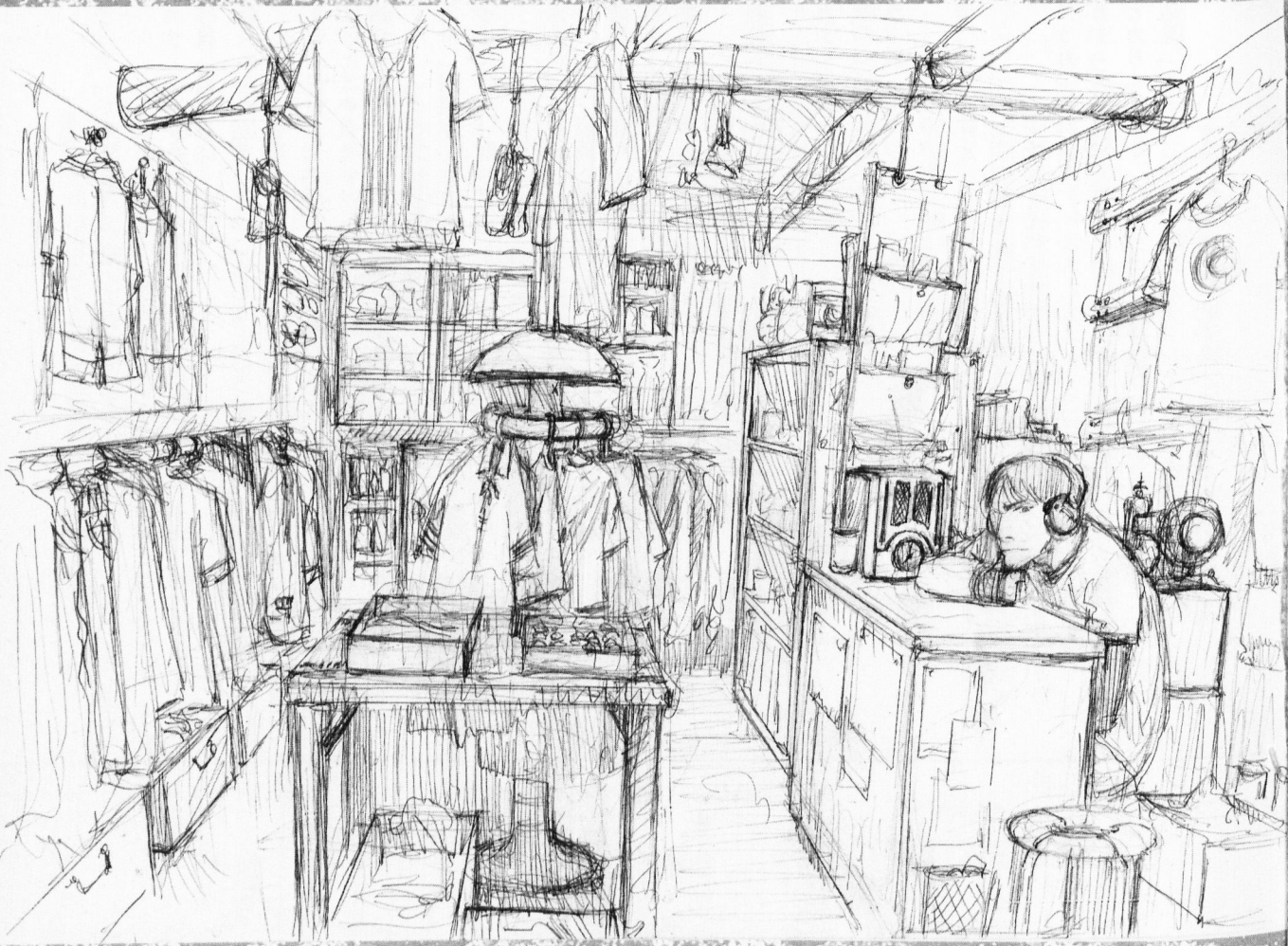


■古着屋外観。どちらもありと気に入っている絵。上図、建物を繋ぐアーチから長い布が垂れ下がっているが、この絵を描いた時には、街中に良くこういう物が垂れ下がっているという設定だった。後で、祭りの時だけにしようと思って、その設定はなくなってしまったが、ここは残した。

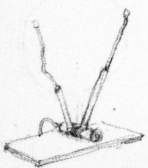
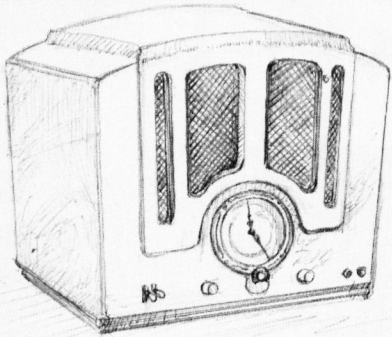
細い路地に商店がある時は、こういう飾り布を看板がわりに出していたりするのかもしれない。

■古着屋の店の名前ははっきりとは出てこないが、別なイラストで、古着屋の紙袋を描いた時、歯車の絵を描いて下に『Full Gear』と描いた気がする。……………駄洒落だ。結局、それはまあはないだろうと言うことで消しましたが。





■ 古着屋店内。これも気に入っている。古着以外にも、ちょっとした小物なんかも売っているようだ。下は古着屋初期稿。ヒゲがなく、ちょっと頼りない。その右は中間の状態。ヒアスをしている。左はラジオとヘッドホン。グリの街でラジオが聞こえるのか？と疑問に思うかもしれないが、西地区にちょっとした電波塔のような物がある。電波塔には、街の外から来たと思われる信号を解析しようとしている研究者の老人と弟子？の少年が住んでいる。



「着選んでいいよ」
ラッカ「いいんですか？」

カナ、ちよっと勢い込んで

カナ「アタシらは!？」
店員「君たちは、これ」

店員、どっこらしよという感じで、カウンターの脇の未整理の段ボールをどきとカナ達の方に差し出す。明らか古着。

カナ「うへえ」

店員「うへえっていうなよ。まだ売りに出してない、掘り出しモン

満載の、未整理、未洗濯の在庫だぜ」

カナ「洗濯はしとけよ!！」
クウ「うへー」

文句を言いながらも、わざわざと服をあさるカナ達。

(こっそり宇宙人民服を混ぜたいなあ)

店員、慌てて

店員「みんなもつてくよ!一人一着だからな」
カナ「わかってるって」

ネム「せちがらいわねえ」

店員、必死に服を選ぶカナ達を見て

店員「のんきにやってみたいに見えるけど、灰羽つても楽じゃ

ないんだな」

カナ「あつたりまえだ」
クウ「ラッカく、決まったく?」

ラッカ「う、うん」

ラッカ、ちよっとあわてて

ラッカ「えーと、えーと……じゃあ、これ」

レジに服を出すカナ達。灰羽連盟と書かれた手帳にサインをし、それを小切手のように切り取って店員に渡す。

ラッカ「それは?」

カナ「灰羽連盟発行の灰羽手帳。まあ、お金の代わりみたいなもん」
ヒカリ「そうか、ラッカはまだ手帳がないんだっけ」

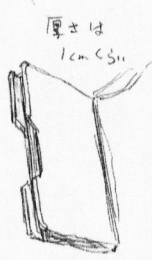
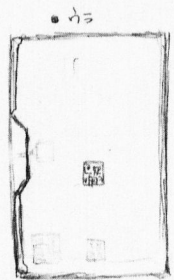
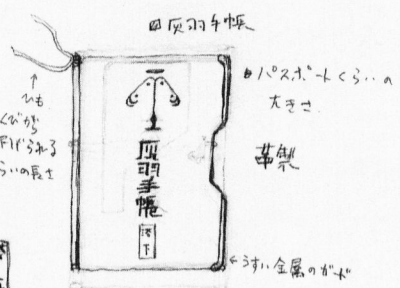
店員「ああ。じゃこっちにサインして。あと粉羽を一枚」

ネム、ラッカの羽先から小さな羽を一枚引き抜く。

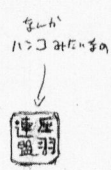
▲ちよっと悪乗り。



▲手帳がない時は粉羽で代用するのか?指紋のように、誰の羽根か分かるのかもしれない。まあ、例外的な処置だと思っけど。



「見 日本語に
みえないよ」
事件で



店員「まいどー」
店員、サインと粉羽を袋にいれ、しまう。

店員、再びラジオのスイッチを入れ、ヘッドフォンをかぶる（第一印象は態度悪い感じだが、話してみたら気さくな兄ちゃんだった、という感じになると良いです）。
ドアを開けてでいていくラッカ達。ラッカ、落書きだらけの窓の奥から、店員がにと笑って軽く手を上げたのが見え、慌ててお辞儀をして、先を歩いているヒカリ達に小走りに追いつく。

●中央広場付近

ラッカ「灰羽連盟って？」

ネム「まあ、灰羽の生活を保証してくれるところ、ね。そのうち、ラッカも連盟から手帳もらえるから」

カナ「アタシ達はお金をもっちゃいけない決まりだから、決められた場所で働いて、給料の代わりにこの手帳につけて買い物するわけ。ちなみにアタシは、あそこの時計塔で働いてんだ。今度見にきなよ」

ヒカリ「私はパン屋、ネムは図書館。ラッカも街に慣れたら仕事を探さないとね。」

クウ「ねえ、あれ」

大通りの北、大門の前に人だかりが出来ているのがかすかに見える。

カナ「大門前広場に市が立ってる。トーガが来たんだ」

ラッカ「トーガ？」

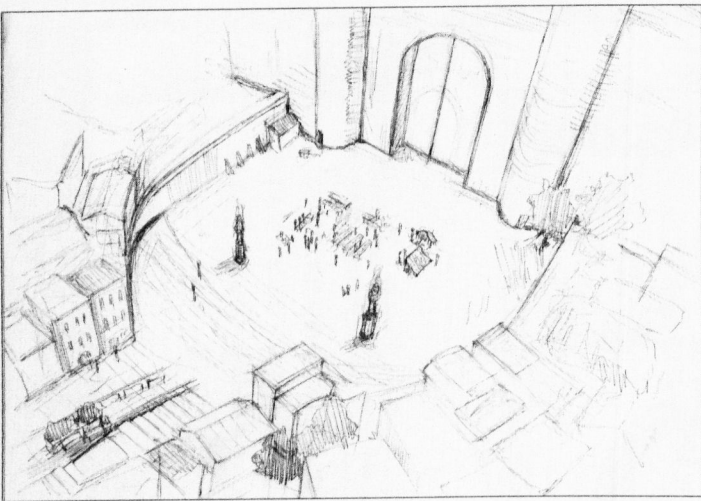
カナ「行けば分かるよ」

●北の大門前

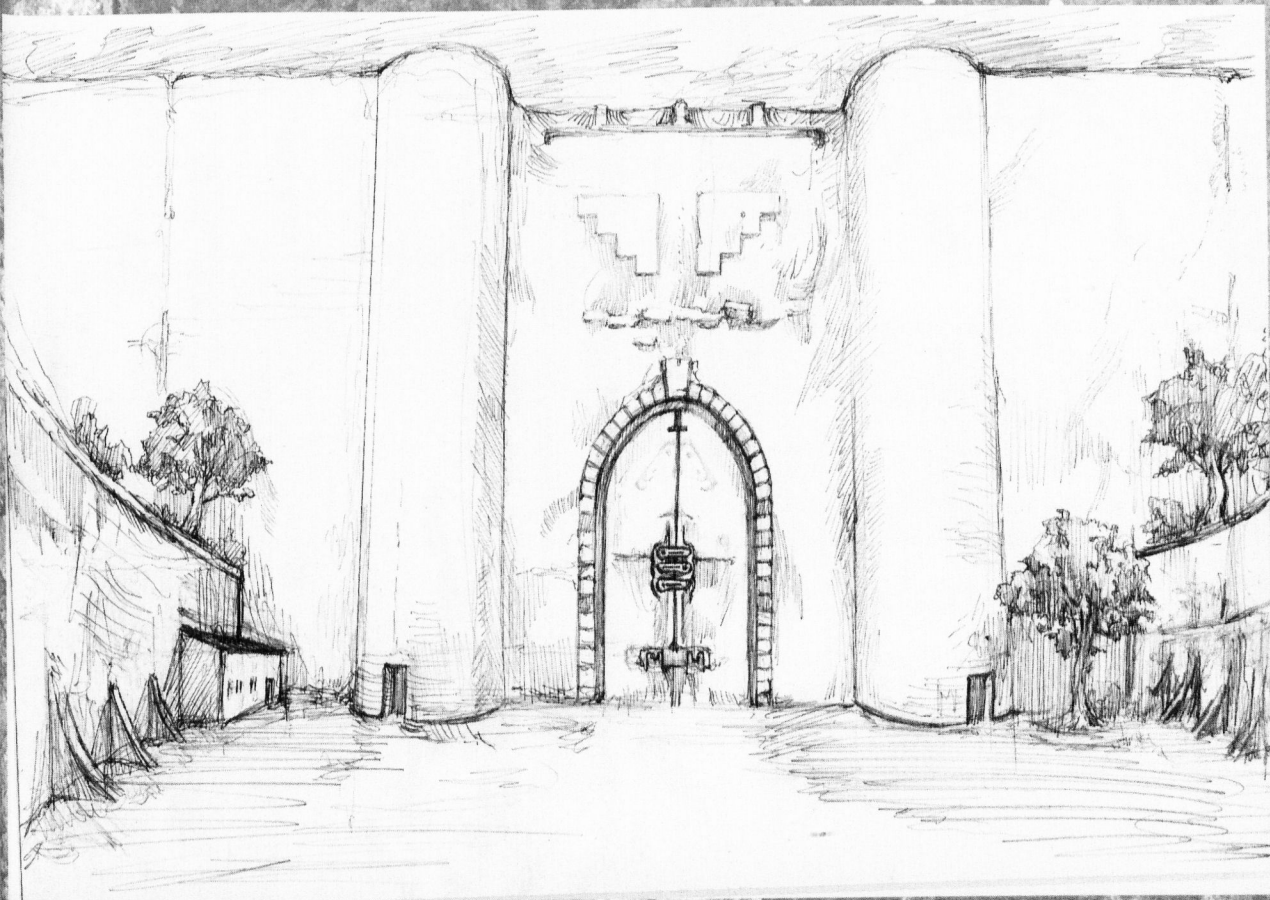
中央広場と大門を結ぶ大通りをゆく一同。他の場所より人出でにぎわっている。やや人並みを縫うようにして、大門前へ向かって歩いてゆく。先頭を行くネム。びよんびよん飛び跳ねて人込みの先を覗こうとするクウ。

▲こういう指示は、文面で書くのではなく、それが伝わるようなシナリオが書けないといけないなど、今読み返して反省。

▲特に何をしている場面という指定がなかったが、噴水前でお茶にするというシーンになっていた。話は特に事件も起きず、説明的な要素の多い回で、こういう細かいところに気を使わないと単調になってしまう。このへんもまだまだ勉強中という感じ。



■大門前ラフ。長い階段があって、一段低くなっている。大門自体は開く事がなく、トーガ達は両脇の見張り塔の下にある出入口から入ってくる。次ページは、その修正と大門設定。門番の見張り小屋が分かりやすい位置に変わった。大門は、ちょっとドラクエっぽいレリーフがある。巨大な門が複数あり、どれも古く、扉と半ば同化してしまっている。



大門前、驚くほど高い壁が眼前に広がっている。大門は開いていない。もう長い間開いた事がないかのよう、太い門（かんぬき）が渡され、錆のような緑青のような付着物で、それ自体が扉と一体化しているように見える。大門脇の小さな通用門が開いていて、異国風の模様の入った長衣を着、フードを目深にかぶった人たちが、ゆっくりした動作で数台の荷車を運び込んでいる。袖口や、フードが風でなびかないように顔の前に吊るされている錘に鈴が付いていて、歩くたびにチリチリと音がしている。通用門には、門の向こうが見通せないように折れ曲がり、何重にも扉がつけられている。

荷車は、やはり文様の入ったフードがかげられて、中身は分からない。黒い犬を連れた厳つい顔の門番と、やはり長衣を着て顔に仮面をつけている男が、長衣の人たちの群れを監視している。

大門前は、市の準備と、遠巻きに眺める住人達でにぎわっている。ラッカ達、人並みを押し分けて、トーガ達が見える位置に来る。

ラッカ「すこい壁」

カナ「街は壁で覆われてるんだ。私たち灰羽も、街の人たちも、街から出たり入ったりすることは禁じられている。唯一の例外が、トーガ」

ネム、長衣の一団を指して

ネム「ホラ、あの荷物を運んでるのがトーガ。外から時々交易にくるってわけ。で、脇にるのが門番と灰羽連盟の話師」

ラッカ「話師？」

カナ、トーガと話師のやり取りを見ながら、話をする。

トーガ達は顔を伏せたまま話師と向き合い、胸の前で両手でなにか仕草をする。手話のように大きなジェスチャーではなく、てのひらと指だけの動作。話師も、同じような動作を返す。

カナ「街の住人はトーガと話をしたり、触れたりちやいけなんだ。

トーガも私たちには絶対に近寄らないし、街にいる間は声を発する事も出来ない。トーガと話をするのは灰羽連盟の話師

10

▲門番と犬には、いろいろ設定やエピソードがあったが、話数が足りず、とうとうセリフすら無くなってしまった。残念。



■トーガ設定。フードなどに重りをつけて風になびかないようにするのは、砂漠地方の民族衣装などでよく見られる。といっても、街の外が砂漠というわけではもちろんなく、単にフードが風でめくれてしまわないためのもの

▲手話の設定については、見た人達が結構きちんと解析してくれていて驚かされた。まあ、基本は指の曲げ伸ばしを「進数」に置き換えて、アルファベットを割り当てただけなんだけど、僕の設定では、いくつか文字がなかったり、アルファベットにない文字が足されていたりするのて面倒だったかもしれない。他にも、特定の場所や物を示すジェスチャーなども設定してあったが、それを含めると、アニメーションの作業が大変になるので、破綻がない範囲である程度省略している。しかし、指がつりそうだ。



■ 話師、ボツ稿。右上が最初のデザイン。『絶対動かせません!』と力強く断言されて却下。その後、デザイン要素を減らすべく試行錯誤を繰り返す。左上は、どこかの地方の羊飼いの衣装が元ネタ。背中、というか肩に棒を通して、動物の皮か、厚い布のような物を垂れ下げるデザインだった。これはボツになったが、背中に羽状の物を背負わせるというアイデアの元になった。

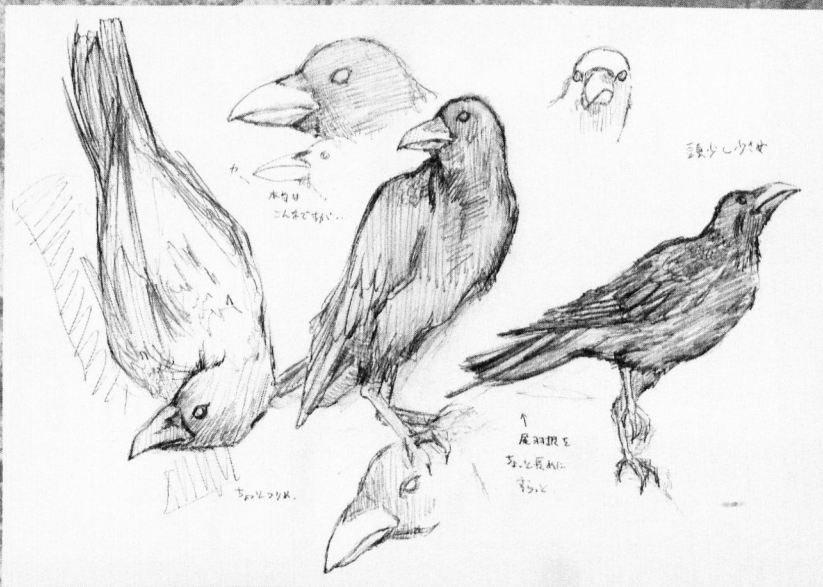


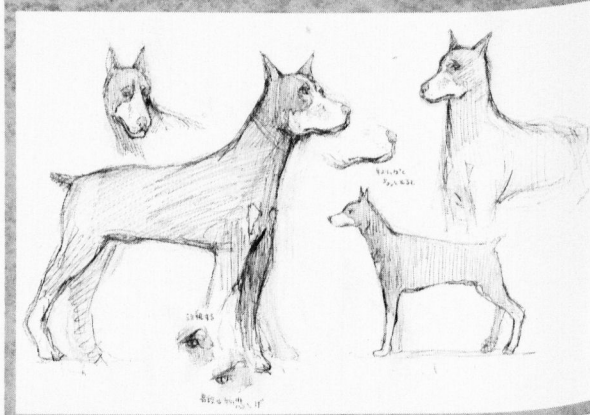
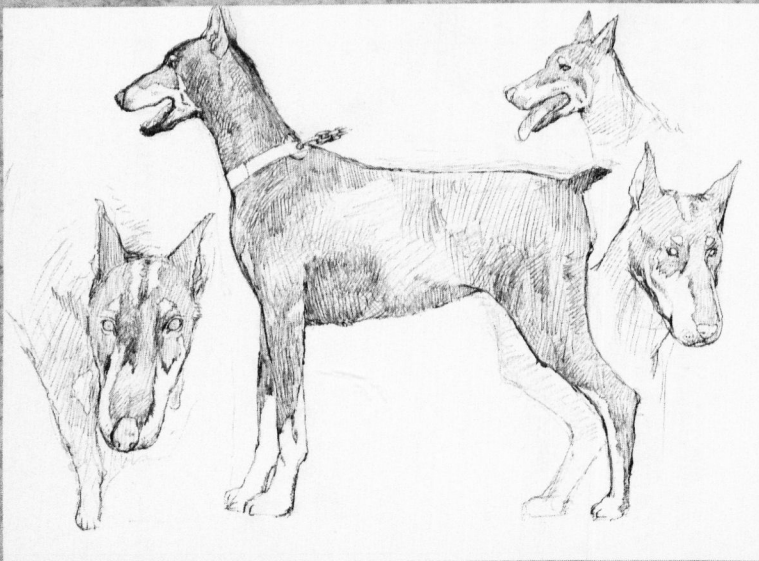


■ 話師、ボツ稿の続き。右上は、だいぶ決定稿に近づいてきている。まだ少し装飾が多い。服の様子は、縞模様くらいが限界かもしれないという事になり、さらに改稿する。連盟のロゴのデザインは、プロデューサーの上田さんから『子宮みたい』と言われる。僕は電気スタンドみたいかなと思っていただけ。右下は、驚きの三つ目版（いや、目はふたつか……）。

■話師、一応の決定稿。紆余曲折ありました。シャモジ面とか機械伯爵とか言われていますが……。これでも動かすにはまだまだディテールオーバーみたいで、色々負担をかけてしまいました。確かにこれを歩かせるのは大変ですよね。杖は最初から変わっていないですね。良く見るとちょっとかわいいデザインです。

顔にも入れ墨というか、ペイントがあります。背中の羽状の板は、リュックのように背負っています。ベルト部分はフードに隠れて見えませんが……。





■門番と犬。犬はもっと練習しないと思ったように描けない。

だけ」

ヒカリ、トーガをまねて、両手を胸の前に出して

ヒカリ「喋る代わりに指で文字の形をつくって、それで話すんだって」

カナ「つまり、灰羽連盟は、トーガと街の交易の仲介係ってわけ。

で、その利益の一部が、私たちのオールドホームの電気とか水道とか、年少組の子共の養育費とかになってるんだ。いくら何でも、アタシ達だけで全部はまかなえないからね」

クウ「わーそうなんだ。ありがとー」

とトーガ達に能天気 hands を振るクウ。

カナ「いつてるそばから何やってんだ！」

と叱るカナ。話師が、かすかに顔を上げてカナ達を見る。

ラツカ、怯えてカナの袖を引く、ネム、それに気づく。

眼そうにぼんやりしていた顔が、すっとシリアスになる。

ネム「行こう。灰羽があまり壁の傍にいと怒られる」

と、みんなを促し足早に大門前を去る。一步遅れて、ラツカも歩き出そうとするが、街路の背の低い並木の枝に止まっていたカラスが、ラツカの注意を促すように、鋭く

鳴く。振り返るラツカ。話師が顔を上げ、仮面をこちらに向けている。仮面に穿たれた穴が、こちらを注視して

いるように見える。

話師は持っていた杖をゆっくりと持ち上げ、トン、と地面を突く。はじかれたように飛び去るカラス。ラツカは

驚いて飛び去るカラスを見る。

カナ「あつカラスだ。あのゴミあさりめ」

ヒカリ「ウチのごみをあさってるカラスとは限らないでしょ」

というヒカリに

カナ「カラスはみんな嫌いなんだ。あんな真つ黒な羽ですいすい飛びやがって」

と脈絡なく愚痴るカナ。ラツカ、立ち去る時、一度だけ

背後を振り返る。話師は何事もなかったかのように、トーガ達の監視を続けている。

ラツカ、話師に対して漠然とした不安を感じる（それが表情で分かるように）。

▲これだと、ヒカリも手話が使えろみたいに誤解されるかもしれないということで、セリフが若干変更になった。

▲このあたり、頭に描いていたイメージにとても近い。シナリオの文面に近いというより、文章に込めた空気感というか、雰囲気をもっと読み取ってもらえたように思う。

● 帰り道

夕方になっっている。てくてくとオールドホームに続く畦道を歩く灰羽達。丘の上にはシルエットだけになった風車。その向こうに森があり、森と森の切れ間に、かすかに壁が見える。

ラッカ「……あそこ、壁が見える」

ネム「そりゃあね。壁に囲まれた街だから」

ラッカ「壁の向こうには何があるの？」

ネム「だあれも知らない。図書館の本を片っ端から読んだけど、さーっ

ぱり」

カナ「読んだつもりで居眠りしてたんじゃないのお？」

ネム「(フン、と鼻で笑って) じゃ、代わりにカナが読む？」

カナ「けーっこう(ネムの口調をまねて)」

カナ、両手を上げて降参のポーズ。

ラッカ「この街の外に、私が今まで住んでた街があるのかな……」

クウ、きよとんとした顔でラッカを見て

クウ「いままで、住んでた……って？」

ラッカ「何も憶えてないけど、私、どこかから、この世界に来ちゃったみたいなのがするの」

ヒカリ「灰羽はみんなそうだよ。私も最初そう思った。年はまちまちだけど、赤ちゃんの姿で繭から出てくるわけじゃないし、

最初から言葉も話せるし……」

ネム「それに、灰羽になりたての頃って、繭の中で見た夢の方がな

まなましく感じられたりするのよね」

ラッカ「そう、そんな感じ……。起きてるのに、夢の感じが、ずっと続いているっていうか……」

カナ「あー、そーいやそーうだった気もするなあ。でも、ここは現実

だよ。ホラ」

カナ、川に近い側の道の脇の草むらを足でどん、と踏み

ならず。大きなカエルがゲコツツと鳴いて、道に飛び出

す。

ラッカ「ひゃっ」

▲この辺り、尺の関係で後半カットになった。話、枚数的には一番短かったのだが、作品の性質上、通常の作品より間を重視する必要があったため。特に話は、ほとんどすべてのシーンが初めて登場する場所で、街の各所を印象づけるためにも、ゆったりした演出が必要だったようだ。夕焼けとカエルのシーンは個人的には好きだったのだけど、帰り道のシーンは今後も何度も出てくるし、やはり切るならここだろう。セリフも少し冗長な気もする。カエルはクウの部屋の人形として無事(?)復活した。

も人気のない寂しい場所にあるし、こーいう伝言だって、いつも、いつの間にか貼られてるし」

ラッカ「そうなの？（ちょっと不安そう）」

ヒカリ「（とりなすように）すく早起きなんじゃない？お寺だし……」（カナの方をきつと向いて）ほらあ、カナが変な事言うから」

カナ「ラッカがおとなしいから、ちょっと元気づけようとしただけじゃん」

ヒカリ「どこがよ」

ネム「カナのそういうとこ、昔のレキそっくり」

カナ「……………ちえ」

形勢悪し、という感じがして、すたすた歩いてゆくカナ。後を追うヒカリ達。

ネム、ラッカにちよつとウィンク（というか目配せ）して

ネム「カナはカナなりに気を使ってるのよ」

ラッカ、ちよつと笑い、うなづく。

● 中庭

カナ「あー今日はよく歩いた。人数分チャリンコがあればなー」

クウ「あ、ねえねえ、ゲストルームの明かり、消えてる」

ネム「レキの引越し、終わったのかな？じゃあ、しばらくはゲストルームはラッカの部屋だね」

ヒカリ「じゃ、ここで解散しようか。ラッカ、明日迎えに行くね」

ラッカ「あ、うん」

ネム「アタシとヒカリは東棟の1階と3階」

クウ「私はゲストルームの下」

カナ「私は北の第二棟のいちばん上」

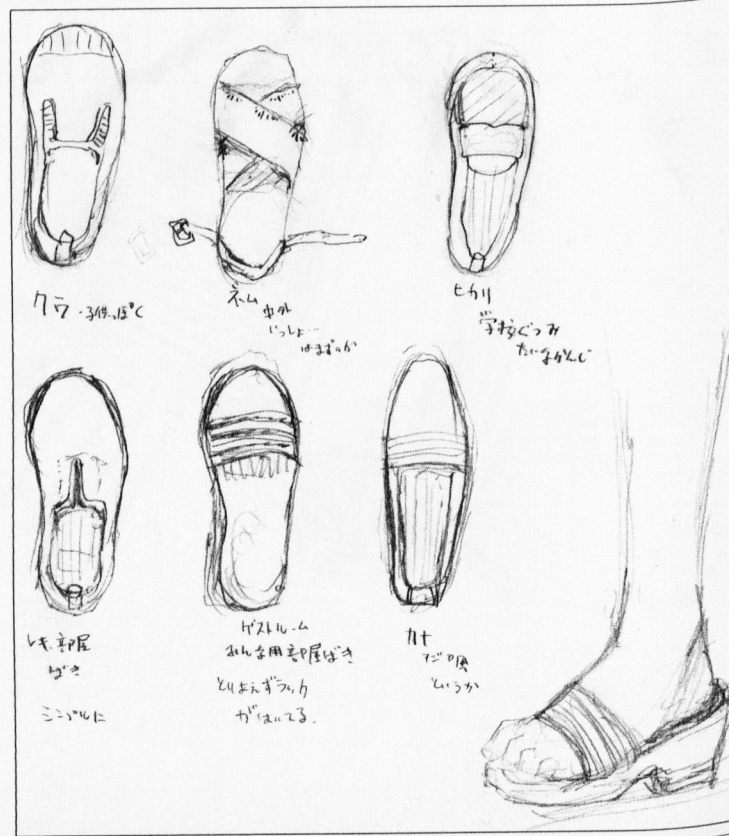
ネム「レキといいカナといい、よく毎日階段上り下りする気になるわね」

カナ「年よりくさいなあ」

クウ「カナは高いところが好きなんだよね」

カナ「どういう意味だ」

■部屋靴。一応設定した。ラッカは結局共用のサンダルを私物化してしまつたようだ。部屋靴と外靴で、靴底の素材を出来るだけ近い物にして欲しいと要望があった。音響さんが苦勞するらしい。確かに僕だったら絶対うっかりミスをすると思う。



▲ストライダ、という、三角形の変なフレームの自転車、オールドホームが廃工場の誰かに使わせたかった。しかし、突飛すぎて説明が面倒なのと、二人乗りが出来ない事、風の丘の脇のデコボコ道は走れそうにないのでやめてしまった。

▲この話数での描くキャラクターのセリフは、全体的に、物語の進行のために必要な会話、というよりは、きやくたーの性格を表すものや、日常を感じさせるようなものに重点が置かれてる。意識してそうしたわけではなく、まだラッカがこの世界で何をやるのか、ラッカにも僕にも分かっていなかったからだと思う。正確には、ラッカはまだ何も分かっておらず、僕は、この物語が最終的にどのような結末を迎えるかはおぼろげに見えてきてはいたが、そのためにラッカが何をすればいいのか分らなかった。ただ、漠然と予感があり、それが、会話の節々から、かすかに見え隠れしている。

一同「じゃ、また明日」

と口々にいい、別れる灰羽達。

●ゲストルーム

ゲストルーム。ぎい、とゆっくりドアを開けて入ってくるラッカ。部屋は薄暗い。かすかな月明かりと、やや青みがかった夜の空気。

ラッカ「レキ……自分の部屋かな」

部屋の奥の、暗い窓際でぼんやりタバコを吸っているレキ。

ラッカ「あ……………」

レキ、ラッカに気づき、窓際に置いておいた灰皿をとり、さりげなくタバコを消す。

レキ「あ、ラッカ。街、どうだった？」

ラッカ「うん、楽しかったよ、服買ったし」

レキ「こはんは？」

ラッカ「あ、帰りにカフェでみんな……………」

レキ「そっか……………」

レキ、テーブルのサンドウィッチをつまみ、疲れた、という感じでどさっと椅子に座る。

ラッカ「あ、ごめん。待っててくれたの？」

レキ「え？あーいい、いい。部屋の片づけでホコリ吸ったら、なん

か食べる気しなくなっちゃって」

ラッカ「お茶いれるね」

レキ「あ、あんがと」

のれんをくぐって、キッチンに姿を消すラッカ。

ぼーっと座っているレキ。しばし間。

キッチンでカラカラ、ガタンという音。レキ、はっとして駆け寄る。

●キッチン

立ちくらみを起こしてしゃがみ込んでいるラッカ。やか

■玄関。画面右の、影になっている部分に靴箱がある。



んのフタが床に落ちてからからと回る。レキ、のれんを跳ねのけて駆け込んでくる。

レキ「ラッカ！」
ラッカ「あ……あれ？」

レキ、ラッカの額に手を当て

レキ「いい、寝てな。ごめん、気づかなくて」

ラッカ「おかしいな、さっきまですごく……」
レキ「気を張ってたからだよ。大丈夫？歩ける？」

ベッドに横になると羽に体重がかかって痛い。

ラッカ「痛い」

レキ「しばらくは体を横にして。すぐ慣れるよ」
横になった拍子に光輪の留め金はずれる。

ラッカ「あ……くっついてる」

レキ「うん……」

ラッカ、嬉しそうに笑う。

ラッカ「へへ……」

レキも笑い、そしてあくび。

ラッカ「寝てないの？」

レキ「ん、まあ……」

ラッカ「レキ、私は心配ないから寝て」

レキ「ラッカが寝たら寝るよ」

ラッカ「もう寝たよ」

目を閉じるラッカ。レキ、微笑んで立ち去る。

レキ「おやすみ」

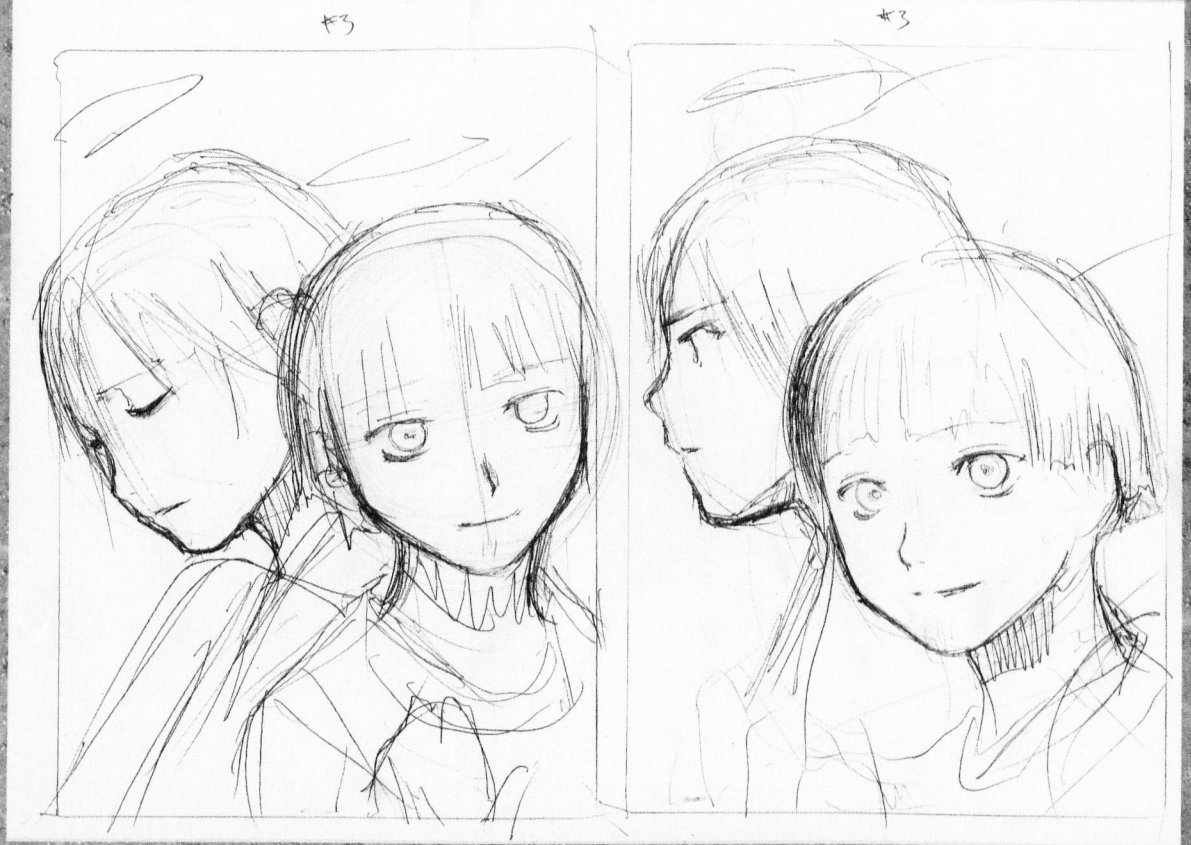
ラッカ「おやすみ」

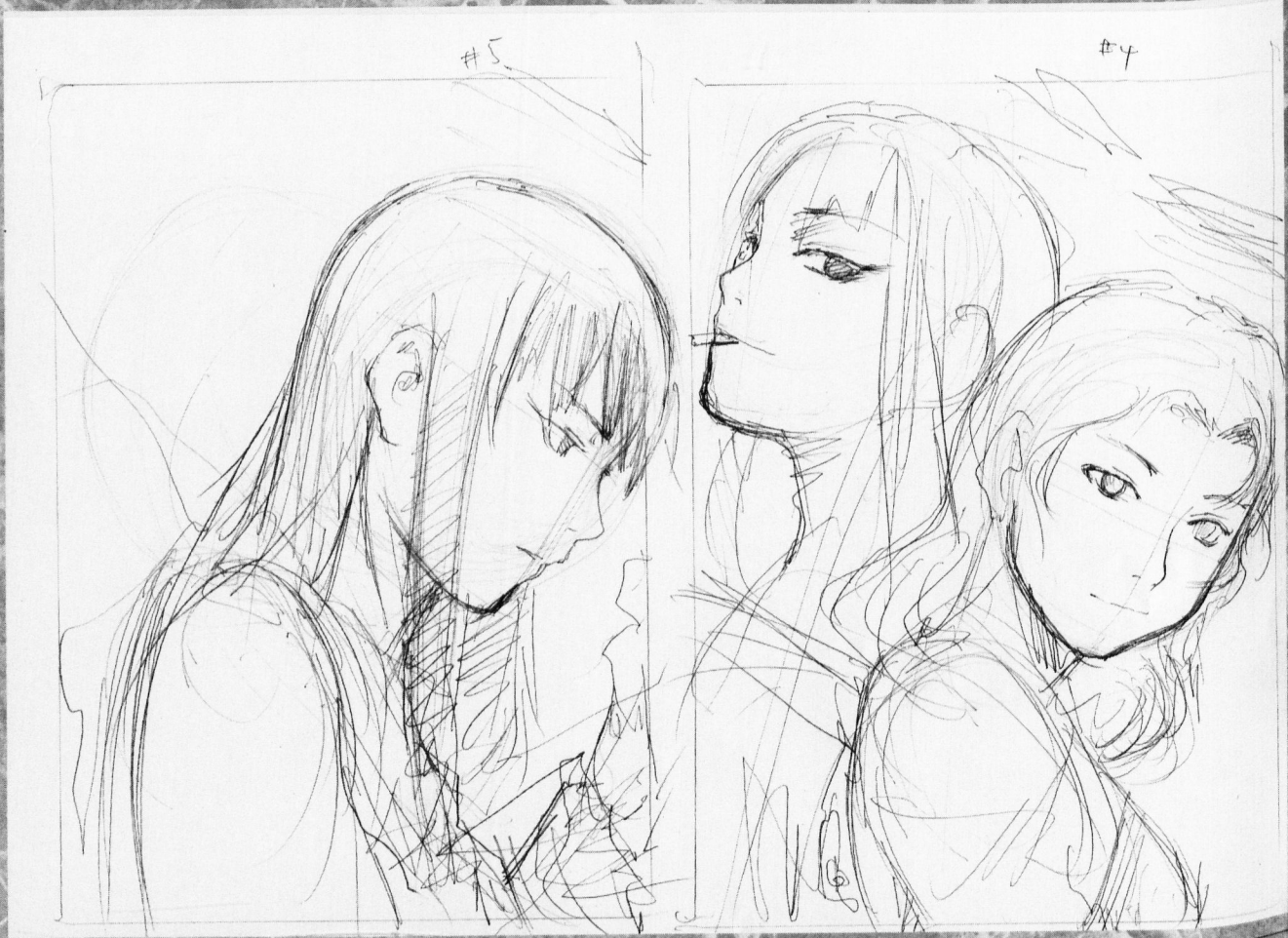
暗転。

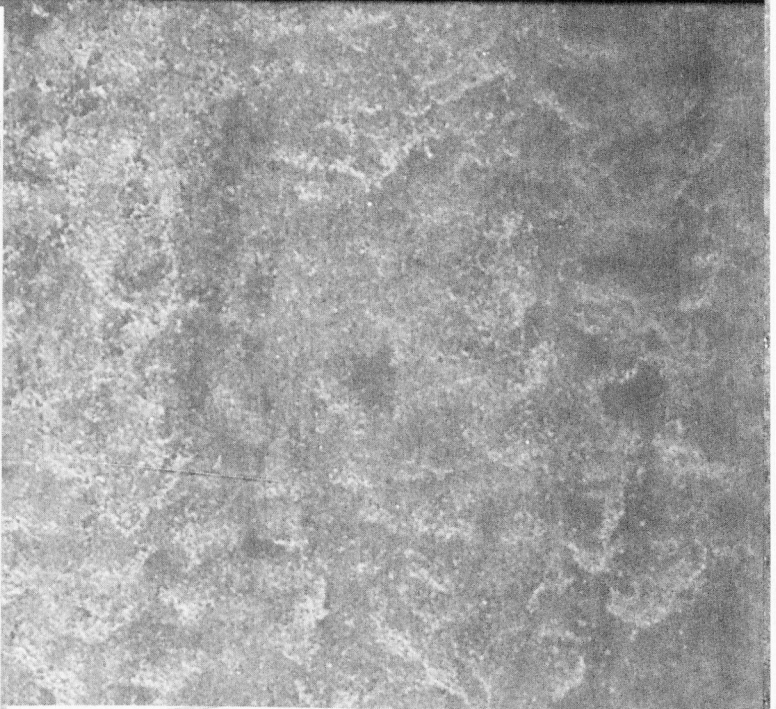
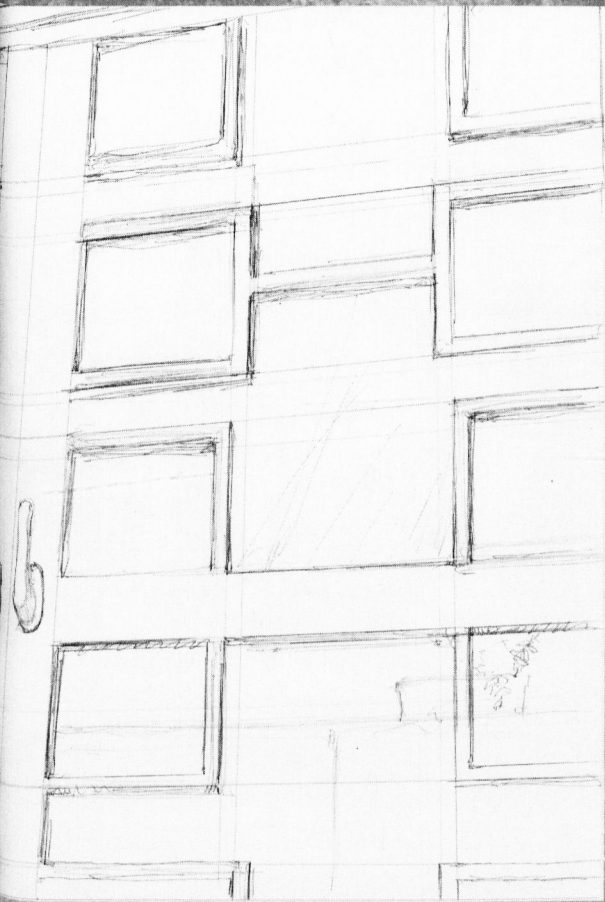
原稿用紙200字詰め5枚

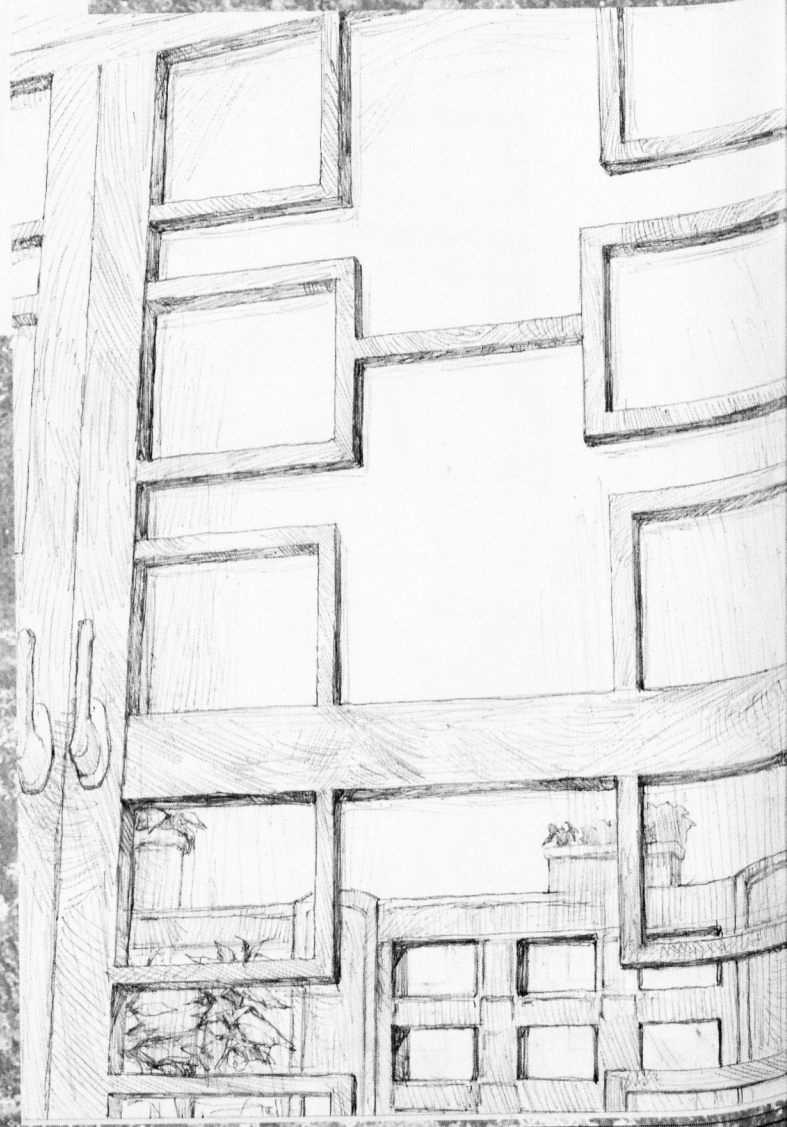
▲なんだか可愛らしいやりとりで、今読み返すと照れてしまう。一度全体を通して観た後だと、このシーン全体のレキの心の中にあるものが理解できて、レキの行動のひとつひとつが、初見とは違う意味を持つと思う。

▲5枚は、シナリオの長さとしてはまあ標準の範囲内。これが話数が進むにつれてどんどん伸びてしまい、大変な事になった(周りの人達が)。申し訳ない。















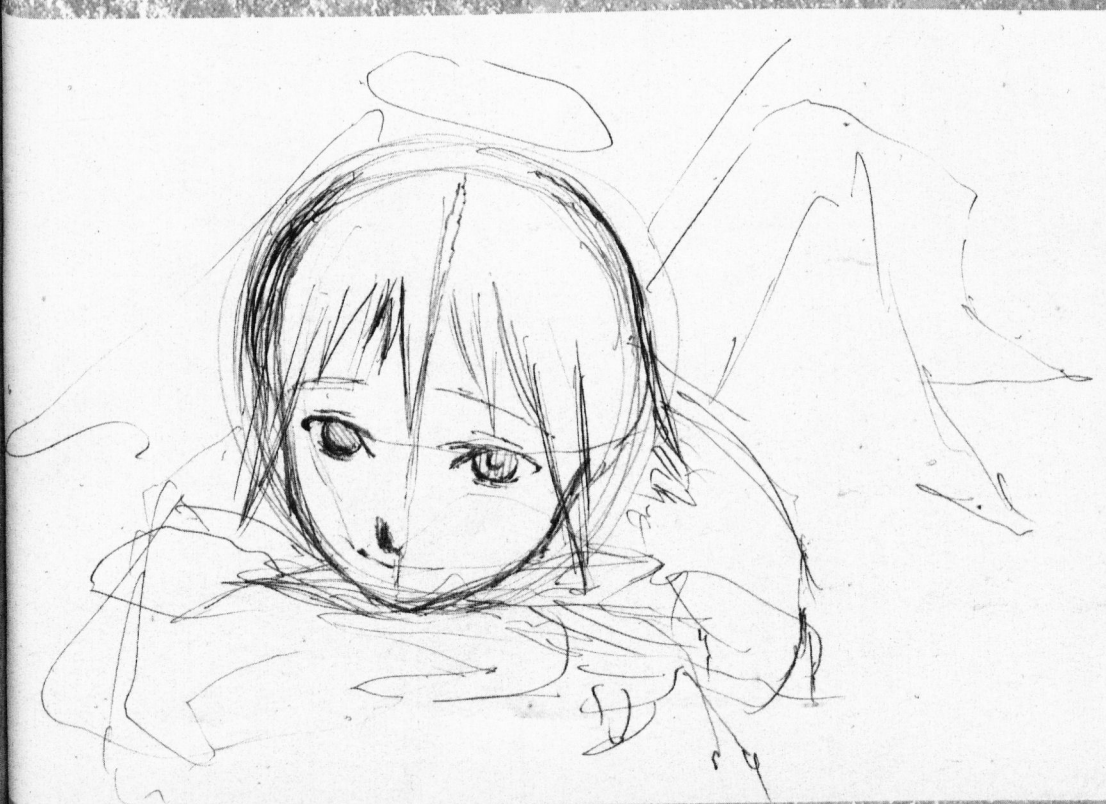












■ P49、50は、使途不明のラフ画だが、ポーズから考えて、おそらくDVD1巻ジャケット時に描いていたボツ案だと思われる。普通は、一枚の紙で描いては消してを繰り返して絵をつくるので、こういう風に、あたりを取って破棄するのは珍しい。やはり煮詰まっていたのだと思う。

あとがき

脚本集の第二巻です。数話まとめてつくろうかと思いましたが、厚くなりすぎるので、1巻1話の形で進めていこうと思います。

この本に収録した2話目の途中から、やっと同人誌用に書いた文字ネームではなく、シナリオとして書き起こしたシナリオになっています。今見返すと、どうしていいか分からず、手探りしている感じが随所に見られて気恥ずかしい限りです。

2話は、大きなイベントの何も起きない話で、ラッカが仲間連れられて街を見に行く、ただそれだけの回です。グリの街における灰羽の位置づけや規則、壁と大門の事、話師とトーガの事、鳥、語らなければならない事が山積していて、説明的ににならないように、でも説明しなければならない、というあたりでずいぶん苦勞しました。結果的には、何も知らないラッカに対して、仲間たちがあれこれ説明する、という形をとりましたが、僕自身、ここで語られる出来事には、詳細な事前の設定があったわけではなく、大半が書きながらその場でつくりあげていったもので、僕自身初めて目にするグリの街の姿に『何故ここはこういう風になっているんだろう?』と、首をひねりながら筆を進めていった事が、結果的には良かったように思います。

この辺りから、街の中の各建物、小物、登場人物などの設定作業が本格的に始まりました。シナリオを自分で描いているので、やたらと設定物が多い時も、誰に文句を言う事もできず、大変でした。

2話は3稿で決定稿になっていますが、改稿は書式の問題が多く、あらずじ自体はほとんど変わりませんでした。長さ的にも、まだ許容範囲で収められています。だんだん筆が乗るにつれて、30分という枠をはるかに超えた大長編を書いて、大変な事になったりもするのですが、それはまた続刊で。

奥付

灰羽連盟脚本集第二巻

発行責任者 AB / 安倍吉俊

発行元 むてけいロマンス

発行年月日 2004年12月30日

連絡先 abetc@mac.com

無断転用を禁じます



